

加藤克巳

昭和二十四年に私は東北の田舎から出て来たが、職を得ておちついた土地は、岩手県の田舎住まいに憧れてやむことのなかった「新歌人集団」発祥の地なのであった。(中略)はじめて加藤氏にお会いできたのは昭和二十五年、私の勤め先の埼玉県立文化会館が主催した「文化人の集い」のときである。当時の若い文学の徒は、どことなく無頼の翳をまつわらせていることが多かつたが、加藤氏は端正な青年実業家という印象であった。

(中略)「未完の歌人」「可能性の狩獵者」、「永遠の出発者」などと呼ばれて来ている加藤克巳であるが、三十年間、そば近く「埼玉県歌人会」で行を共にして来ている私にとって、加藤克巳は論作を含めて「思慮深い実践者」であり続けた。

「善知識」
『加藤克巳全歌集』栄 揭載

鈴木幸輔

鈴木先生を存じ上げたのは、多分昭和二十九年ごろであったと思います。埼玉県歌人会が出来て、県立文化会館に勤めていた関係で事務局を担当した私は、それから毎年春秋の短歌大会の仕事もさせて頂いていました。鈴木先生は最初から歌人会の常任委員として、大会の選者も兼ねておられました。同じ東北の生まれと分って、格別に親しみを感じて下さったようでした。

(中略)だんだん大会も盛んになって一人ではまにあわなくなり、私の妹も一緒に受付をするようになって、「妹、余り似ていないね」などと言われたりしました。(中略)たまたま姿が見えないと、「妹はどうした、工合でも悪いか」と聞かれるのでした。(中略)妹が生来心臓弁膜症をもっているのを知られてからは、お会いする度に妹のことを尋ねて下さいましたが、その妹も八年前に心臓麻痺で他界しました。

「遠い日の鈴木先生」
「長風」昭和55年11月号掲載

星野丑三

今度の『今生』は、『九曜』『緑陰集』『風土』『日常』に次ぐ第五歌集で、著者は昭和四年に香蘭短歌会に入社、村野次郎氏没後の昭和五十五年から「香蘭」の代表となっておられる。そのかりそめでない歌歴の分厚さは、歌集一巻を覆っていて見事である。

デパートに何見しならむ修道尼が
忍び笑ひをしつつ出で来ぬ
人のぬ中まる見えにスーパーは
閉店直後無気味に灯る

集の初めの方にある作品であるが、現代的な風景を切り取ってかいま見せている。
(中略)系譜をさかのぼれば北原白秋系ということになろうが、ここまで至ると、門流を超えた人間的な滋味が読む人の心をうるおしてやまない。

「星野丑三歌集『今生』」
「埼玉歌人」No.34 昭和62年6月28日掲載

大野誠夫

大野誠夫という名前を知ったのは、私がまだ岩手県で教員をしていた戦後まもないころである。昭和二十三年の「短歌研究」の歌。

兵たりしものさまよへる風の市
白きマフラーをまきふたり哀し

戦後の釜石の町にも、特攻隊の生き残った若者が帰っていて、落下傘の布であったという白い絹を襟に巻いて歩いていた。その一人は教えていた女学校の生徒の兄であつたりした。「新歌人集団」という清新しい名前が、田舎町の文学少女をいたく刺激した。大野さんにはじめてお会いしたのは、私が埼玉に移ってまもないころで、大野さんは三十代半ばであつたろう。

(中略)当農業関係の団体に勤めておられて、職場の仕事で出かけた浦和の新聞社でよく一緒になった。広報紙を編集しておられたが、その割り付けの早いこと、さわやかなことに私は舌を巻いた。

「いまよりは未来は善けむ 一大野誠夫さんの悲劇—」
「短歌」昭和59年4月号掲載

今回の企画展にあたり、各歌人の歌集、関連書籍のほか以下の本を参考にした

『改訂版 埼玉短歌事典』(埼玉県歌人会/編集 埼玉短歌事典刊行委員会事務局 2017年)

大西民子 (1924~1994)

戦後を代表する女流歌人のひとり。
岩手県盛岡市出身。25歳の時に大宮へ移り住む。自身の日常生活を赤裸々に詠んだ第一歌集『まぼろしの椅子』で注目を集め、「風水」で最優秀賞を受賞。紫綬褒章受賞。
1994年死去、享年69歳。



2025年11月15日
さいたま市立大宮図書館
さいたま市大宮区吉敷町1-124-1
電話 048-643-3701
FAX 048-648-8460

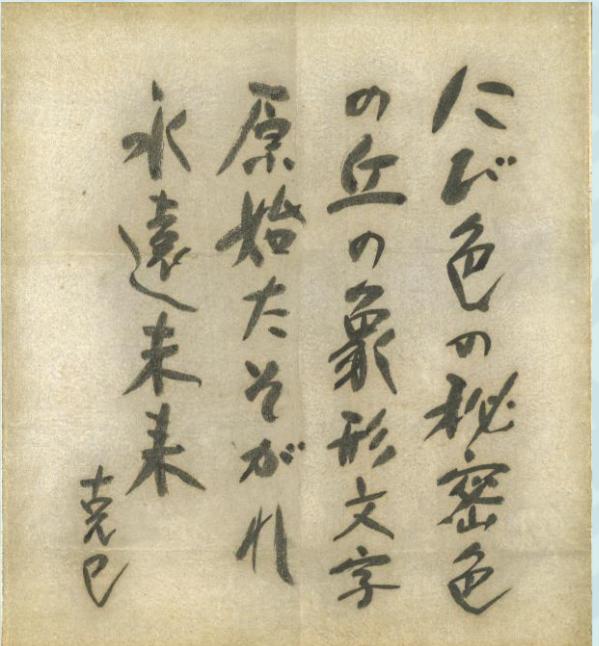
第4回 埼玉の歌人たち —短歌に込めた想い—

2025.11.15 (土) → 2026.1.12 (月・祝日)

埼玉県で長年活躍した、4人の歌人の歌や自筆資料を紹介します。

歌人名	No.	種別	内容
加藤克巳 かとうかつみ	1	色紙	「にび色の秘密色の丘の象形文字原始たそがれ永遠未来」 加藤克巳 筆
	2	原稿	「表現の意味」 加藤克巳 筆
	3	愛用品	文鎮
	4	短冊	「緑のしづくにぬれて森ふかくあゆみゆくとき未来はにおう」 加藤克巳 筆
	5	歌集	『宇宙塵』 加藤克巳 著 1956年刊行・初版 書肆ユリイカ
	6	愛用品	落款印
星野丑三 ほしのうしづぞう	7	色紙	「賜はりしこの老境を素通りに詠むはわか生を詐るご志」 星野丑三 筆
	8	色紙	「はきものゝ土に屋敷を盛りくるる客は宝とみ祖教へつ」 星野丑三 筆
	9	短冊	「どこやらに釘打つおとす春の日にもの創りある音はたのしき」 星野丑三 筆
	10	歌集	『歳月』 1991年刊行・初版 香蘭短歌会
	11	歌集	『米寿』 1998年刊行・初版 香蘭短歌会
	12	歌集	『卒寿』 1999年刊行・初版 香蘭短歌会
	13	愛用品	しおり
鈴木幸輔 すずきこうすけ	14	短冊	「よく見れば色小鳥みてかぎりなく雨木隠りにあらはれて飛ぶ」 鈴木幸輔 筆
	15	色紙	「霜の夜のわれの眉間に立つ如き北斗にむかひ帰りたりぬ」 鈴木幸輔 筆
	16	歌集	『禽獸』 1963年刊行・初版 白玉書房
	17	歌集	『幻影』 1972年刊行・初版 古径社
	18	原稿	「禽獸」 鈴木幸輔 筆
	19	愛用品	ノート
	20	色紙	「行ひの罪ふかきまでもいはぬ鳥けだものを愛しみ来しや」 大野誠夫 筆
大野誠夫 おおののぶお	21	色紙	「川べりの故郷遠くしてはらからの知らざる家に水音を聴く」 大野誠夫 筆
	22	歌集	『川狩』 1971年刊行・初版 桜桃書林
	23	歌集	『水幻記』 1984年刊行・初版 雁書館
	24	歌集	『水観』 1986年刊行・初版 雁書館
	25	原稿	「水観」 大野誠夫 筆
	26	絵画	「白鷺」 大野誠夫 筆

[所蔵者] No. 2、No. 3、No. 5 ~ 9、No. 11 ~ 21、No. 26 ご遺族、および関係者
No. 10 さいたま市立中央図書館
No. 1、No. 4、No. 22 ~ 25 さいたま市立大宮図書館



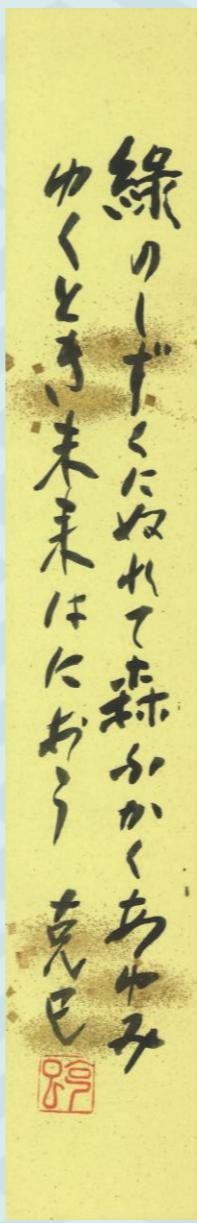
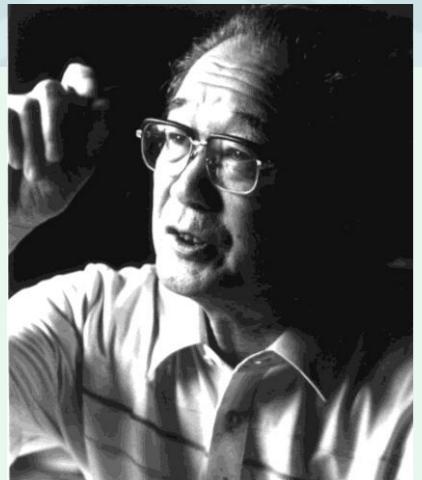
自筆色紙(No.1)

「にび色の秘密色の丘の象形文字原始たそがれ永遠未来」

門人達にとくに愛された克巳の代表歌。「にび色」は濃いねずみ色。たそがれ時、にび色が支配しあじめ騒りができると、丘は急に秘密めく。見さだめがたい形が底ごもるのは古代の象形文字か。古代から続く〈時〉が、いかにも不思議に思えてくる。原始にも、このたそがれは丘を支配しただろう。この〈時〉は、永遠に、未来に向かって続いてゆく。

加藤克巳 1915-2010

1915年、京都府綾部市生まれ。14歳で現さいたま市に転居。旧制浦和中学校在学中に、高橋俊人の「菁藻」に入会する。戦後大野誠夫らと「鶴苑」を創刊。新歌人集団を立ち上げる。「鶴苑」終刊後「近代」を創刊、のちに「個性」と改題する。現代歌人協会理事長、埼玉県歌人会会長(初代)等歴任。第4回遼空賞受賞。勲四等瑞宝章受章。平成8年度宮中歌会始召人。



自筆短冊(No.4)

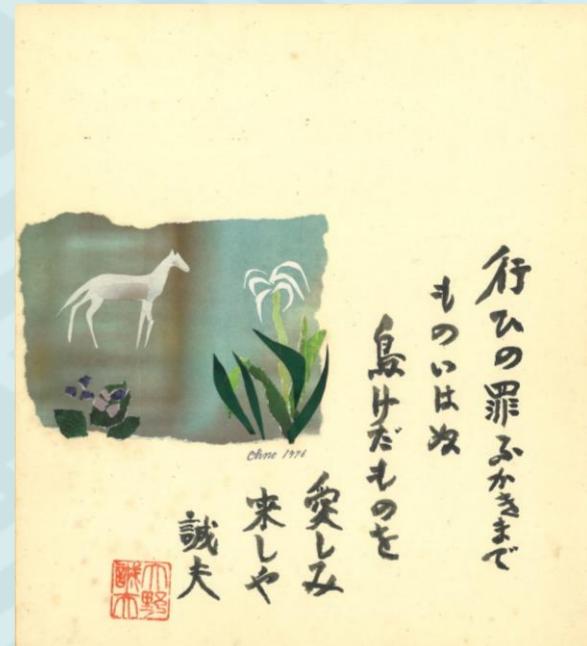
「緑のしづくにぬれて森ふかくあゆみゆくとき未来はにおう」

初句の字足らずが巧み。音符で表現すれば[↓↓↓]。休符が入ることで、「緑」と「しづく」が少し断絶する。「緑」と「しづく」の主従関係を壊し、それぞれの存在感を際立たせる。克巳は石の歌人とも云われるほど「石」を多く詠んだが、「しづく」の歌も多い。石もしづくも光をたたえている。光すなわち波が未来や過去と現在をつなぐ。

自筆色紙(No.20)

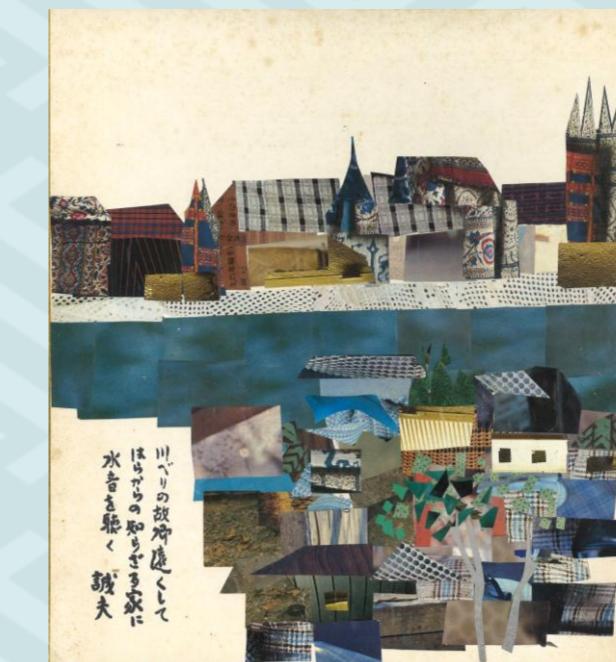
「行ひの罪ふかきまでもものいはぬ鳥けだものを愛しみ来しや」

初出は「短歌」昭和40年11月号「青浜」と題する32首中の1首。大野51歳、(時には)罪深いと感じる生き方をしてきたことに対して、私は、生きものを愛することで、自他を慰め、埋め合わせにして来たのかも知れない、と言う意味。自分に厳しく対峙し、ふつと自省の念に駆られた時の作品。



大野誠夫 1914-1984

1914年、現・茨城県稻敷郡河内町生まれ。1931年に「ささがに」の会員となる。1934年に「短歌至上主義」に入会。1944年、浦和市に転居する。戦後、加藤克巳らと「鶴苑」を創刊する。新歌人集団の結成に参加する。「鶴苑」終刊後「砂廊」を創刊、のちに「作風」と改題。埼玉県歌人会常任理事。第五歌集「山鳴」、第六歌集「象形文字」が日本歌人クラブ推薦歌集に選ばれる。現代短歌大賞受賞。



自筆色紙(No.21)

「川べりの故郷遠くしてはらからの知らざる家に水音を聴く」

初出は「作風」昭和50年1月号。大野61歳。「川べり」とは大野の生家がある茨城県河内町の利根川近く。「はらから」とは「兄弟姉妹」、「知らざる家」とは熱海市水口町の家のこと。兄弟姉妹にはまだ知られていない。海へ続く坂道の途中にあって門の前の側溝には絶えず清水が流れていた。18歳で上京して以来初めてにして最後の定住地となった。流離の思いが深い作品。